



# 卓 話



## 「イタリアでの留学経験」

### 青少年交換派遣学生

岩崎 美帆さん

私は去年の夏から約1年間東北イタリアのウーディネというところで生活してきました。9月の半ばに学校（新学期）が始まり、12月20日位までは毎日学校でした。そして、国の大半がキリスト教であるイタリアではクリスマスは日本というお正月のように大切な行事な為に家族皆で過します。日本とは違って、お正月は家族皆がそれぞれの友達とパーティーをしたりして過ごします。1月10日位から学校は始まりますが、2月には日本にはないカーニバルの休日が約5日間あり、3月にもキリストの復活を祝う為のパスクアという約1週間のお休みがあります。そして6月初めに学校が終り、6～8月、3ヶ月間バカンスを楽しみます。



カーニバルの時期はアメリカのハロウィンのように、子供達は仮装をして楽しめます。私の町はヴェネチアから電車で1時間半ほどの所でしたので、私はあの有名なヴェネチアのカーニバルへ、友達に頼んで連れて行ってもらいました。皆は前々から衣装を準備し、この日の為に1年かけて作る人もいます。私もマントを借りましたが、予約をしたり意外に面倒でした。しかし当日はサンマルコ広場に豪華な衣装を身に纏った大勢の人が集まり、タイムスリップしたかのような夢のような空間でした。

又イタリアではクリスマスの次に大切な行事がパスクアです。枝に卵に絵をかいた飾りを沢山ぶらさげて飾り、子供達は中におもちゃの入った大きなチョコレートの卵をもらいます。

日本を出発する前は、飛行機に乗ってホストファミリーに会うまで、留学するという実感が殆どありませんでした。皆と離れて言葉も分からない、文化も知らない地で生活するという事が、頭では分かっているも心の中では信じられず、楽しみなのか、不安なのか良く分からないふわふわした状態でした。皆さんもご存知だとは思いますが、イタリアは食物・ファッション・芸術と3拍子揃った国です。人種は明るく陽気で、なんととってもイタリアの男は軽いという印象ですね？私は出発前に、会う人皆に「男の人に気をつけて」と言われた気がします。そのイメージを胸にふくらませ、イタリアという国を自分の中で妄想してい

きました。しかし、イメージを勝手にふくらませすぎた為にショックを受ける事もありました。

学校の初日、私はイタリア人は陽気なのだから、クラスには入ったら一同歓迎してくれると考えていました。しかし実際は一言「今日は」といったらすぐに授業が始まり、休み時間も少し挨拶をしたくらいで、皆の輪には全く入れず、その日家に帰った時には愕然としてしまいました。想像とあまりに違い、これからどうすればいいのか一瞬分からなくなってしまったからです。でも、すぐに気持ちを入れ替えました。皆から寄ってきてくれないなら、自分から行けばいいのだと気が付きました。それからは、言葉が殆ど出来ないの、日本のお菓子を持って行ったり、雑誌を見せたり、皆にイタリア語教えて欲しいと、コミュニケーションを沢山とろうと頑張りました。するとクラスメイトも「美帆、日本語しゃべってみて」と日本に興味を持ち始めてくれ、日本語の辞書を買って勉強しようとしてくれる子もでてきたりしてすっかりクラスの一員になれました。

ホストチェンジする時には、美帆が引っ越しをするからお祝いだといって、不思議な理由でパーティーを開いてくれました。私達が持つイタリア人の一般的なイメージは、南イタリアに於いてのみいえることで、私のいた北部ではいわれてる程ラテン系ではありませんでした。

学校の授業で1番日本と違うと感じたのは、美術史の授業が1年生からある事です。学校の旅行でローマに行った時も、私は「すごい！きれいだな！あんな昔にこんな技術があったんだー」という一般的な感想ばかりでしたが、皆は「あ、これはだれだれが作ったあの時の作品じゃない」「やっぱりこうなってるんだ」と感じ入って見ていました。私はそれに感心するとともに、知識があると感動は何倍にもなる事を教えられ、自分も勉強しておけばよかったと後悔する事が多々ありました。

次にホストファミリーを紹介します。5ヶ月で2つの家族にお世話になりました。

第1HF：私の為に毎日ケーキを作ってくれるホストママ、毎朝車でバス停まで送ってくれるホストパパ、優しく面白くてお洒落な2人のホストシスター、1日中ひたすら喋っている雑学豊富なホストブラザー。

第2HF：お喋りで毎日元気なホストママ、たばこをやめて20キロふとってしまったホストパパ、皆の間でかっこいいと評判なホストブラザー、いつも忙しいけど笑顔で楽しいそんなホストシスター。ホストママとパパを最初に見た時はこれからの不安になりました。

本当に2家族ともいい家族で、「私達は美帆の家族だから、いつ戻ってきてもいいからね。ずっとここにいるから

早く帰ってきてね」といつも嬉しい事をいってくれました。

日本の家族の在り方とイタリアの在り方に、大きな違いがあるように感じました。日本では今、家族は食事をばらばらに食べたり、子供が高校生位になると殆ど家族一緒に出かける機会が減ったりと、家族一緒に何かをするという事が少なくなってきています。しかしイタリアでは、夜に家族揃って食事をするのはもちろん、社会人でもお昼休みが3時間程あるので、家に帰って家族と一緒に食べます。そしてホストのどちらもそうでしたが、30才近いホストブラザーも両親と一緒に住んでいて、東京と大阪位離れて住んでいても、週末には家に帰ってきていました。これもイタリアでは少しも変わった事ではありません。

イタリア男はマザコンだいう事を本などで目にしていたのですが、実際に見て思ったのはマザコンという以上に、家族を本当に大事にしているのだと感じました。日本では大人になってからもずっと家族といたりすると、少し変な印象を受けますが、根本的に日本人が思う家族の在り方とイタリア人のそれとは違いがあるのだと思いました。またホストブラザーが言っていたのは、イタリアではお母さんが厳しく強すぎるから、子供は従うしかない。子が親離れをしないのではなく、お母さんが解放しないからだという事でした。理由はどうあれ、日本では家族で過ごす時間を大切にすることが減っているので、日本もこうなればいいのと感じる事が多々ありました。

家族と離れて暮らしてみても、初めて家族という存在の大きさに気がつきました。どんなに離れていても応援し、心配しつづけてくれる家族に、私はずっと支えられていました。自分を成長させる為に、すぐに親を頼りたくない、心配をかけたくないと思い、私からあまり連絡を入れない時期もありました。しかしそんな時も、傍で私を見ているのでは思う程良いタイミングで「大変だろうけど、頑張り過ぎないでね」、「なんでも言ってくれ、美帆は1人じゃないから」という手紙やメールが届きました。イタリアでもホストファミリーはいつも助けてくれ、友達も私を気にかけてくれて、周りの皆に助けられていたけれど、やはり家族なしでは無理だったのだと感じました。

そしてこの留学中に人の温かさを実感させられました。出発前にはれからは全て1人で頑張らなくては！と考えていたのですが、これは大違いでした。どこに行っても、日本の皆、イタリアの皆に助けられてばかりで、本当に今まで以上に支えられてばかりの1年でした。人の温かさを一杯もらったからか、私も以前より自分の気持ちを正直に表現出来るようになり、有難うという言葉の大切さを思い知った気がします。

行く前によく言われたのが「食べ過ぎないようにね」でした。この忠告も意味なく1年間で7~8kgふとってしまいました。ということで食事の話をしようと思います。

日本のイタリアンの方が美味しいと聞く事がありますが、私はやっぱり本場は美味しいと感じました。私は和食が大好きなので1年間も食べないでいられるかと不安に思っていました。イタリアではもちろん毎日がイタリア料理です。飽きるかと思いましたが、2人のホストママは本当に料理上手で、自分でも驚く事に、1度も日本食が食べたくて

しょうがないという事はありませんでした。もちろんピザ作りもパスタ作りも教えてもらいました。イタリアではクリスマスにトルテッリーニというお肉やカボチャなどをパスタ生地で作ってスープに入れて食べる料理を食べます。その為私もホストママと2日間かけて1200個も作りました。作りすぎて途中で嫌になりましたけど、本当にイタリアでしかできないイタリアらしい事をしているのだと感じながら頑張って作りつづけました。

又ピザ屋さんに行くと、日本では1枚を分けて食べる事が多いですが、イタリアでは、1枚1人で食べます。男の子は1人で2枚以上食べる子もいました。ピザやパスタだけではなく、デザートなども含めて美味しいものは山ほどありました。毎日美味しいものを食べて、尚且つイタリアでしか食べられないものも沢山食べる事が出来たので、このお肉もいい思い出だと感じてしまいます。

派遣までの1年間ロータリーで茶道を教えて頂いたので、折角だからと思いホストシスターとお茶会をしました。又日本の文化を紹介しようと、定番ですが学校で折り紙で鶴を折ったら、「美帆が立体的な小鳥をつくった！！」と思った以上に感動してくれました。

日本料理もお好み焼き、天ぷら、親子丼、ラーメンなどいろいろ作りました。中でも1番人気だったのは親子丼でした。最初に見た時は皆「え…これ食べなきゃいけないの」という感じでなかなか手を出してくれなかったのですが、1口食べたなら「こんな味初めて！おいしい！」と喜んでおかわりもしてくれました。作り方をホストママに教えたから、まねして作ってしまう程でした。

町にもお寿司屋さんなどは一応ありましたが、日本についての知識は殆どなく、日本といたらアニメ・すし・車などの印象はあっても、中国と日本の違いも良く分かってなかったり、行く前はまさかと思っていた「日本に待はまだいるの？」という質問を真剣にされたり、「美帆はフォークとナイフ使うの上手だね。僕はお箸でそんなに上手く食べれないよ」と不思議な事を言われたりしました。

そこで今の日本をきちんと知ってもらわなければと思い、「日本ではイタリア料理も普通に食べるし、椅子に座って食事するし、寝る時はベットがあるよ」と言うと、皆目を大きくして驚いていました。

東京から来たと言うと、「凄い！大都会でしょう」と言うのに、日本という国については何も知らない事を初めて知りました。しかしその分教えがいがあって面白く、自分の国を皆にどんどん知ってもらおう楽しさを味わう事が出来ました。

ホストロータリークラブの例会場は綺麗なお城のような建物でした。日本と1番違うのは夜にやるという点で、皆パーティーに行くかのように綺麗な格好でした。そしてきちんとした話し合いもなく、夜の8時から12時近くまでずっと食べてお喋りをして過ごすという感じでした。あと日本と違うなと感じたのは、多くのロータリアンさんは奥さんと一緒に参加しているという点でした。

私は小さい頃からフルートをやっていたので、クリスマスパーティーではピアノの人と歌の人と練習をして小さなコンサートをやったりしました。

私はイタリアで日本にはない問題に直面することができ

ました。それは移民問題です。

滞在許可書をとりに警察に行った時、アフリカ人、中国人、東欧人など様々な人種の人がイタリアでの生活を求め警察の人と掛け合っていました。突然泣き出す人怒り出す人と色々な人が部屋から溢れるほどたくさんいました。初めてみる光景に驚いてしまいましたが、この時初めて、移民を受け入れる国の姿を目の当たりにできました。

夜に町を歩くとジプシーの人がバラを売りに何度も近寄ってきて、ローマを観光中には5歳位の小さな男の子に手慣れた手口で携帯をすられそうになったり、やはりイタリア人のような普通の生活を送れない移民の人々の現状を見る事ができました。しかし一方でうまくやっている人もいました。私の親友になったアレという子はボズニアからの移民でした。アレは私と同時期にイタリアにやってきて私と同じクラスでした。その為私はずっとアレと一緒に、彼

女が新しい生活になじむ姿をずっと見てきました。そして少しずつ生活に上手くなじんでいっていました。アレの頑張る姿はとても輝いて見え、私はそこから大きな力をもらいました。

私達日本人にはあまり身近ではないけれど、世界の抱える差別問題、移民問題に初めて深く考えさせられました。なかなか解決するのは難しい問題ですが、イタリアに来たからこそ、肌身をもって向き合う事ができたので、これからもっときちんと考え、今の自分の環境に感謝しないとダメだと思いました。

スポンサークラブとなって下さった四谷ロータリークラブの皆さんには感謝の気持ちで一杯です。そして今日のような機会を与え下さって有難うございました。まだお話ししたい事は沢山ありますが、今日はこの辺りで終わります。